
約束

黒狐由意

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Nコード】

N5305D

【作者名】

黒狐由意

【あらすじ】

先に公開の『後継者』と同じキャラでの別の短編です。やはり平安・師弟憎悪が根底を走っております。弟子は師匠を憎み、師匠はそんな弟子を心から悲しんでいる……そんな感じの話です。

ある快晴の日。庭に面した場所で二人の男が話していた。

片方は白面の人物で狩衣に烏帽子姿、もう一人は法師の衣を身にまとっていた。

後者の男が口を開いた。風がそよと揺れた。

「それはそうと……。この間の約束を覚えておいでですか」

「……約束？」

前者の男が薄笑いしながら問う。表情も態度もそれが忘れていない事を示している。

「そうです。奥義書の事ですよ」

後者は区切り区切り、わざと言葉を強調して答える。

「……忘れてはいないよ。それがどうかしたか？」

後者の男はくす……と笑った。そして勝ち誇った様に、短い文句を叫んだ。

「……………！！」

「……何故それを？」

前者の男は問った。答えはない。

後者の男は俯いていた顔を挙げた。

白い式神が大きな鎌を振り上げている所だった。この間、二人は何の気なしに賭けをしたのだった。言葉遊びのような幼い賭けだった。前者の男の持つ秘法の奥義書に書かれている内容を後者の男が探り出して当てて口に出来たらこの首をかけようとそういう約束だった。

後者の男は目をつぶった。

激しい音がした。

目を開けると床で血の気のない顔が微笑んでいた。

黒衣の公卿が灰色の微笑みを浮かべている。……どこかで見た様な恐ろしい記憶を甦らせる微笑み。

「……………」

法衣姿の青年はその人物から後ずさった。周囲を見回せば、来るまい、と避け続けていた筈の場所であった。

「ようやくここに来ましたねえ……？待っていたんですよ」

青年はその言葉に、改めて相手の顔に見覚えなどない事に気がつき、勇気をふりしぼった。

「どなたですか？あなたは……………」

「……………」

公卿はその名を述べた。しかしそんな訳はなかった。その名前の持ち主は先日、式に打たれて死んだ筈だ。

「……おかしな……。その人はもうこの世には……………」

青年はいつそ笑ってそう答えた。

「いいえ……。この通りピンピンしているではありませんか？」

見知らぬ公卿はそういつて自分の黒衣の胸を叩いた。

法衣姿の青年は薄気味悪さに立ちすくむ。

「……いい加減にしてくれ！！私は先を急ぐんです！！」

「……待つて……この『橋』からは出られませんよ……何故なら今

ここは……………」

公卿が『橋』の下を指差す。マグマの様な地獄の様な赤い流れ。

高熱の湯気。周囲の暗黒。ここは今……………」

「黄泉！？」

青年はすぐる様に公卿を見た。うつすらと分かりたくない相手の正体が分かり掛けて来た気がする。

「……………馬鹿馬鹿しい……………」

マグマの煮え溶けた泥の中から巨大な箱型の物が浮かび上がった。その棺桶の様な箱の中からずぶ濡れの美貌がぬつと現れる。白い手に長い鎌を持って。

『……つぎは……あなた……の……番……だ……ご……主人……様が……お……

待ち……かね……です……」

死の世界の式神が棒読みで言う。

「やめろ……あれは賭けだったんだ……！やめろ……！！」

法師は頭を抱えて橋に崩れ落ちる。

笑い声がした。女性のそのような澄んだ綺麗な声。

「……？」

目を開く。法師姿の青年は目の前に真っ白な顔を捕らえる。

「気がついた？」

白い顔が微笑む。法師はぞっとする。これはあの死に顔。そして黄泉の公卿の微笑み。「……放せ……！」

相手の男は見固めで法師を両腕で抱え込んでいたのだが、苦笑して腕と身体を離す。

「……恐ろしい物を見た顔だね……」

冒頭の前者の男が何事もなかった様に微笑んでいる。場所も忌まわしいあの境界ではない。屋敷の庭に面したあの部屋だ。

「……！」

男はかの奥義書を持っていた。彼に向かってまっすぐ突き出している。

「……？」

法師の青年は戸惑う。

「……こんなもの……。こんな物質の為に……。心を悪い色に染めるな……。こんなもの……。こんな只の紙切れ」

前者の男はそう言って法師の青年に巻き物を渡し、手を引く。

「それは海の方こうでは何冊も何冊も同じ物が写し取られ出回っている。ここでは珍しいと言っただけさ……」

男の真っ白な頬に何か伝わっているのを見て、法師は衝撃と後悔という胸の激痛を覚える。

「……本当はあの時……。橋から……。突き……」

白い面の男は口を閉ざして首を振った。「いや、止めておこう……
どうせ……」

この伝説は法師の死で結末を迎えると現在は伝わっているらしい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5305d/>

約束

2010年10月28日08時33分発行